3/26(土) まいど！倫理です。今週の倫理が「さきがけて行う」の実践の報告がなされています。人に誘われて行うよりさきがけて行う事の方が美徳が良い！幸せ度がアップ！

今週の倫理

2月のテーマ ｜ 先手の実践

2022. 2. 26～3. 4

1270号

さきがけて行った地球倫理の実践

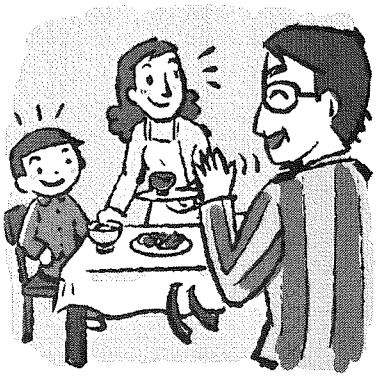
豊かな生活と快適な環境が整えられている昨今です。一方、環境問題は近未来の人類の生存を揺るがすものとして、世界的に取り組むべき大きな課題となっています。

倫理研究所第二代理事長の丸山竹秋は、一九八五年に、地球をより美しく、より清らかにしていくことを目指して、「地球倫理」を提唱しました。「地球倫理」とは、日々学び、実践している倫理を地球的な視野に広げて行なうものです。

その具体的な実践として、「緑を増やそう」「ゴミを減らそう」「水を大切にしよう」などがあります。特別な日を設けなくても、日常の仕事や生活や遊びの中で、一人ひとりができることをすることが大切なのです。

丸山竹秋は、この地球倫理を提唱する以前から身近な実践に取り組んでいました。早朝から自宅周辺の空き缶拾いを行ない、それは晩年に体調を崩しても続けていたといいます。その様子は、『竹のごとく』（丸山敏秋著）に紹介されています。

台風の迫ってきていたある日、雨風の中をビニールコートを着てアルミ缶を集めに近くの通りを歩いていた。捨てられているこれらを一つ一つ拾っては、片足で少し潰すようにして、手に持ったビニール袋に入れて廻る。集めたものを溜めておくと、知人が時々軽トラックで収集に来てくれるのだ。それらを目方で現金にかえ、そのお金を溜めておいて、やがて車椅子を求め、日本赤十字病院に送る活動に寄与していた。



とある十字路で、信号待ちをしていた乗用車の窓が開き、父親らしい人が、空き缶を一つ窓の外へ放り投げた。すかさずその横から、その子どもと思われる男の子が、「ぼくもッ」と叫んで、自分の空き缶を同じように放りだしたのである。

二つの空き缶が共に風の中を道端の草むらの中にコロコロと転がっていった。その車の走り去っていった後で、竹秋はその空き缶を拾いあげ、手元のビニール袋の中に「ありがとう」としまいこむのだった。

丸山竹秋は、道端に捨てられた空き缶を〈誰かが拾うだろう〉と見過ごすのではなく、人に先んじて拾っていたのです。

このように、挨拶でも清掃にしても、トップが率先して範を示さなれば、部下は後についてこないでしょう。従業員のあり方は経営者のあり方を映しているといっても過言ではありません。

従業員の働く姿勢は上司が何を言ったのかよりも、どう行動したのかによって変わってくるのです。家庭においても、親ができていないことを、子供にやらせようとするのは至難の業であるといえます。

また、実践に取り組む際の心のあり方も大切です。腹を立てながら取り組んでいるのでは、物事はよい方向に進みません。私たちも「ありがとう」と、先手で真心を込めて実践していきたいものです。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局